

第 6 6 回学習会を、平成 2 8 年 9 月 2 3 日 (金) 19:00~20:00 福翔高校にて行いましたので、報告いたします。

## 第 6 6 回の内容

講師 重枝一郎先生

今、なぜ道德教育なのか

- 1 日本の学校が地道に取り組んできた「非認知能力」の育成
- 2 時代が変わった
- 3 人事課長が何を見るのか
- 4 全教育活動で鍛える
- 5 今、なぜ道德教育なのか
- 6 「特別の教科 道德」の目標
- 7 「特別の教科 道德」の指導



### 【演習】

モラルジレンマ授業「図書当番の仕事」(小学校高学年 - 思いやり・親切・公德心・規則の尊重)

GWT「孫悟空！お師匠様を救え」(カード情報実習)

## 今、なぜ道德教育なのか

### 1 日本の学校が地道に取り組んできた「非認知能力」の育成

- ・基本的な生活習慣と非認知能力がよい影響を与える(就学前教育で高めることが有効、労働生産性により影響を与えるなど)
- ・「非認知能力」とは「自分を律する力」「やり抜く力」「助けてもらう力」「教わる力」「聴く力」「リスペクトする力」「共感する力」などわかりやすく表現
- ・対して「認知能力」とは全国学力・学習状況実態調査やPISA(学習到達度調査)のように測ることができるものが注目される。

### 2 時代が変わった

- (1) ごっこ遊びの変化
  - ・物を作る(包丁、フライパン) 配膳(この10年前くらいから)
- (2) いとこの数
  - ・ライバルがいない(密かに競争していたのに)
- (3) ななめの関係
  - ・自由で個別的な関係(ぐっと伸びる)
- (4) 小3, 4年で鍛える
  - ・エース教員はこの学年(ゴールデンエイジ)
- (5) 話し合いはできるが意思決定はできない
  - ・小3, 4年のときの遊び(秘密基地、変更ルール遊び)
- (6) 男の一人ぼっち
  - ・今でも女子は3,4人組で変化なし、男子は大グループが一人になっているから自分の立ち位置がわからない。組織の中での役目意識が獲得できていない。

### 3 人事課長が何を見るのか

- (1) テクニカルスキル
  - ・ TOEIC 点, 専門性, 資格
- (2) コンセプトスキル
  - ・ 人をまとめる, リーダー体験
- (3) ヒューマンスキル
  - ・ 人間力 (体験力, 言語力)
- (4) GWT が教員採用試験に . . .

### 4 全教育活動で鍛える

- (1) 何をしているか  
学力向上, いじめ防止対策, 開発的生徒指導, キャリア教育, 人権教育, 道徳教育, 不登校対策 . . .  
トータルデザインになっているか?
- (2) ラーニング・コミュニティをつくるために  
教科活動 (AL) 3 / 5, 教科外活動 (特活, 部活動) 2 / 5 この 2 / 5 が学校文化を魅力付ける
- (3) レバレッジを考えているか  
既存のいい文化を認めた上で, 変えられる何かを変える。ひとつ変えて, つながりを考えて他の質も向上させる  
レバレッジ: 改善可能, 効果が高いポイント (SWOT 分析)
- (4) 成長物語を共有する (人と人の間に価値が生まれる)  
まわりの人に支えられながら一步步成長し, 自信をつけ, 社会で活躍する道筋をつかむという成長物語を共有できれば, 日々の授業や学校行事などの意義も生徒に伝えやすい。活動一つ一つに意味をもたせる物語の威力を効果的にするための振り返り活動 (意味面, 感情面) を活用する必要がある。
- (5) 分担物語を共有する (関係性の中に自分の役割がある)  
他者との関係の中で自分とは何かが決まるし, 自分の役目も見つけることができる。

### 5 今, なぜ道徳教育なのか

- (1) 特別の教科「道徳」の設置の背景
  - ・ 教育の根幹 (教育基本法第二条)
  - ・ 学級格差 (「道徳の時間」 「特別の教科 道徳」)
- (2) いじめ問題への対応
  - ・ 人の本質的からの指導が不可欠
- (3) AL の目標と同じ
  - ・ 社会の急激な変化と次々に起こる事象への主体的・協働的対応
  - ・ キーワード「ひとりになれる。ひとつになれる」

## 6 「特別の教科 道徳」の目標

### (1) 道徳教育の目標

「自己の生き方（人間としての生き方）を考え、主体的な判断の下に行動し、自立した人間として他者とともによりよく生きるための基盤となる道徳性を養うことを目標とする」

### (2) 「特別の教科 道徳」の目標

「よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うため、道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を（広い視野から）多面的・多角的に考え、自己の生き方（人間としての生き方）についての考えを深める学習を通して、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる」

### (3) 何が変わる？

「発達の段階に応じ、答えが一つでない課題を一人一人の児童生徒が道徳的な問題と捉え向き合う『考える道徳』『議論する道徳』へと転換を図るもの」(文科省通知)

### (4) 主体的な学習にするために

- ・道徳的な価値の介在する道徳的問題を自分の生き方に関わる問題として捉え、その解決をめざさせる。（「生き方」が考えられる問いを）
- ・児童生徒のそれまでの道徳的価値の理解では解決できない問題状況等が提示され、「なぜ？」という問いに始まる問題解決的な学習であれば効果が期待できる。

## 7 「特別の教科 道徳」の指導

### (1) 道徳的価値に照らして物事や自分を深く見つめられるようにする

- ・授業で道徳的価値の意義を深めなければ、上滑りになる。

### (2) 授業後の学習へつなげる

- ・授業後にどのように支援するか、あらゆる日常の場面で働きかけることが大切。

### (3) 問題解決力の育成を図るようにする

- ・具体的な問題を主体的にかかわり克服していける力を育成するために、道徳の授業と学級活動との連携を図ることが重要。

### (4) 総合道徳学習の取組

- ・総合単元的に一ヶ月くらいの時間をかけてダイナミックに取り組むのもあり。認知的評価、情意的評価、行動的評価を適宜行い、充実を図る。

### (5) 自己成長させるために

- ・「自己評価 自己指導への課題の把握 授業後の課題の追求」をノートにまとめさせる。

### (6) 評価

- ・成長を励ます個人内評価として、数値でなく記述、入学者選抜の可否には活用しない
- ・実践事例を共有、評価の視点共通認識、授業者は学年全体でローテする、生徒の受け止めを保護者に発信（学級便り等）
- ・道徳性は人格全体に関わり、生涯通じて育み続けていくもの
- ・基本は、「観察」と「言語分析」
- ・発達障害への配慮（学習上の困難さ【学習障害】、集中・継続ができない【ADHD】、他者との関係形成の困難さ【自閉症】）

## モラルジレンマ授業の実際（風土会 42 回参照）

「何をすべきか」というように「すべき」を用いて意思決定させる。価値選択をしっかりとらせる。

第3の方法はダメ。（方法論ではない）

問題になっている2つの価値それぞれについて、判断した結果起こるプラス面、マイナス面をギリギリまで考え込ませる。

自分にとってもみんなにとってもためになる言動の追求になる。

評価は、授業が意味ある体験になっているかどうかなのだが、個人的な印象で行われることも多い。この場合、評価が当たっていないことが多い。たとえば、黙って人の話に耳を傾け、自分の頭の中で思いを巡らすことは十分に議論に参加していることになっているのだが、発言していないから評価が低いなどがある。

理由付けの記述の分析から、「他者の立場から問題を見つめなおし」「社会的な見通しに立って問題を考える機会」「自分が気付かなかった見方との出会い」などを評価のポイントにする。

## ジグソー法の活用

エキスパート活動・班（一つの視点から話し合い、ちょっと詳しくなる、人に伝えたいことがある状態になる）

ジグソー活動・班（それぞれのエキスパートの考えを持ち寄り、説明する。多様な考えにふれ、自分たちの考えにまとめる）

クロストーク活動・班（教室全体交流・まとめ・最後に再度自分の考えをまとめる）

### 【演習】

モラルジレンマ授業「図書当番の仕事」

（小学校高学年 - 思いやり・親切・公德心・規則の尊重）

学校の代表として科学研究の発表をする一郎は、明日の発表会をひかえて、手直しのために図書室で熱心に調べものをしている。4時半の下校のチャイムが鳴り、図書委員長の圭子は、急いで図書室を出るように一郎を促している。すると、一郎は、明日の朝まで何とか本を貸してくれるように圭子に頼んでいる。しかし、それは、貸し出し禁止の本である。圭子は、どうすべきか迷っている。圭子は、一郎の願いに応じて、その本を貸すべきか、それとも、図書室のルールを守って断るべきか？

GWT「孫悟空！お師匠様を救え」

（カード情報実習）



## 解 説

キーワードで発信する

現在、様々な教育改革が行われていますが、昔と今を比べて何が違うのかを肌で感じているのは、私たち教師です。教育改革で使われている「キーワード」を自分なりに理解し、学級や学年、保護者に発信すると、説得力があります。言葉には力があるからです。

最近、「非認知能力」という言葉が使われるようになりました。わかりにくい言葉ですが、どのような意味があるのか自分なりに整理しておきましょう。

数値化できるのが「認知能力」で、テストなどの点数として示すことができます。しかし、「自分を律する力」「やり抜く力」「教わる力」「共感する力」などは、数値化することはできません。しかし、日本の教育では大切にしてきたものであり、今、このような力にスポットがあたっているのです。「アクティブ・ラーニング」にも、今、スポットがあたっています。「道徳教育」もです。

このような数値化できない「非認知能力」を、どのように「見える化」するかは結論が出ていません。伸びにスポットをあてるという考え方もできるかもしれません。今は、やっとスポットがあたったという状況です。

## 「非認知能力」の中でも大切な、助けてもらう力

新しい環境の中に入ったら、まわりの人に聞いて教えてもらわないと、何もわかりません。その時に、親切に教えてもらうと、その人を好きになります。そして、その人が困ったら助けたいと思います。それが、人情です。このように、困難を乗り越えるためには、「助けてもらう力」が必要です。この力がないのは、人としての器が小さいのです。「助けてもらう力」とは、弱々しいのではなく、「人を好きになる秘訣」なのだと定義づけて子どもに教えます。人を好きになると、波及効果がたくさんあります。「いじめ防止」「不登校対応」「学力向上」にもつながります。そして、困難を乗り越えたとき、人は成長を実感します。

## 時代の変化

保育園の先生の実感として、昔は包丁で「トントントン」と切って作る遊びをしていたのが、この10年くらいから、いかに美しく盛り付けるかという配膳にこだわって遊ぶ様子が見られるそうです。

また、少子化のために「きょうだい」「いとこ」の数が少なくなり、競争意識が薄れているようです。このような時代の変化をとらえた話を保護者に発信すると、教科の話をするよりも納得感があり、信頼を得ることができます。さらに、例え話や自己開示を混ぜると説得力が増します。これからの時代、保護者や地域を巻き込んだ教育が求められています。

## ななめの関係

子どもとの関係を考えると、親や先生は「たての関係」、友達同士は「横の関係」、地域の人とは「ななめの関係」と言えます。例えば、教師との関係がよくない子どもも、地域では、さわやかな態度をとっていることがあります。学校で素直になれない子どもも、地域のスポーツクラブの監督さんに、「あいさつの大切さ」について話されると、素直に聞き入れることがあります。何気ない一言で、子どもは劇的に変化します。そのことを地域の方々に伝えて、声かけをしてほしいとお願いします。そのようなお願いができるのも、教師だからこそです。「どうしたらいいですか」ではなく、具体的な話と一緒に、具体的なお願いをしてみましょう。そうすることで地域の方々も、積極的に子どもに関わり、やりがいを感じるようになります。

## キャリア教育の視点に立った小中連携教育

昔の小学校では、担任は2年間持ち上がっていましたが、最近では、学級崩壊が増えていることから、毎年担任が替わるようになりました。

みなさんは、小学校1年生の時のクラスメイトを覚えていますか？発達段階を考えると、学級全体で何かをしたというよりも、個別的だったと思います。それが、3、4年生になると、今、中学校や高校で行っている授業の「型」や、家庭学習の「型」を学ぶ、ゴールデンエイジが始まります。小学校3年生で習ったことは、大人になっても忘れずに定着しています。

小中連携教育を考えるときに、小学校3、4年生で習ったことを振り返りながら、中学校版にアレンジするという発想も大切です。

例えば、小学校6年生の担任と子どもとの間に信頼関係があったとしたら、小学校の学級目標などの掲示物を中学校でも掲示すると、効果的です。子どもに、小学校の掲示物に込められた「意味」を聞きながら、中学校生活とつなげて深めていき、追加していくことができます。小学校の先生と中学校の先生は仲がよいと、子どもに感じさせるのも効果的です。

## 意志決定ができない、今の子どもたち

「アクティブ・ラーニング」は、意見交流をさせる授業です。このような授業が主流になり、今の子どもたちは、上手に話し合いができます。しかし、意志決定をする機会は、あまりないようです。

例えば、昔の子どもは、秘密基地をつくって遊んだり、空き地で遊んだりしていました。どんな風に基地を



作るか、誰が何をするか、ルールをどうするかなど、遊びの中でひとつひとつ、自分たちで決めていました。

今の子どもたちは、放課後にクラブチームに入って活動をしています。監督やコーチがいるので、活動の質は高いのですが、自分たちで何かを決める場面はほとんどありません。そうであれば、意見交流するにとどまるのではなく、「決める」にこだわって活動を仕組む必要があります。

### 悩める子ども・・・男の一人ぼっち

昔から、女子は3，4人のグループをつくって、他のグループの悪口を言って結束したり、内輪もめをしたりしていたので、今もあまり変わりありません。しかし、男子は、良くも悪くも質は別として、いろいろな役目がありながらも全体で遊んでいたのが、今は、ひとりぼっちで悩む男子が増えています。全体の中での自分の立ち位置を見極めたり、役目を引き受けたりする体験がないので、なかなか話が通じないことから、スクールカウンセラーにつながることが多くなっています。

目の前の子どもに言わなければならないのは、社会に出てから評価されるのは、リーダー性や専門性、人間性などの「非認知能力」だということです。

最近では、企業の入社試験や教員採用試験でも、GWT などの活動を取り入れています。活動の様子から、人間性を評価しているのです。

### 成長物語を大切にする

まわりの人に支えられながら一步步、社会で活躍する道筋をつかむという「成長物語」を子どもと共有するためにも、行事や学級活動、道徳や総合的な学習の内容を「自分史」としてファイリングさせ、大切にしていきます。そうすると必ず、学年や学校としての威力を発揮します。それが、学年文化や学校文化をつくるのです。

### なぜ、学校に来るのか

正論を言っても、子どもの心には響きません。特に、思春期の子どもは反発心もあり、正論だとかえって入らない場合があります。だから、物語が必要なのです。例えば、「細胞の話」から、なぜ、学校に来るのかという話につなげることができます。

生物としての私たちの個体ができあがるには、他者との関係が重要な役割を果たしているというのです。

受精卵は2つ、4つ、8つとどんどん細胞分裂していきますが、当初、細胞には分担が決まっていません。細胞が心臓になる、脳になる、筋肉になる、骨になるという分化は、最初から全部遺伝子にプログラムされているわけではないそうです。では、どうやって細胞は役割分担をしているのでしょうか。

実は、胚という細胞の塊の中で、細胞と細胞が、互いに物質やエネルギーを交換し、情報交換をして自分の役割を決めています。どんなものにもなれる可能性をもっているけれど、周りとの関係や相互作用がないと細胞は自分が何になるか決められないそうです。細胞は単体では生きられないのです。細胞が周りとの関係の中で自分の役割を決めて、その結果、私たち個体はできあがったのですが、私たち個体もまた細胞と同じではないのでしょうか。

人もまた一人では生きていけません。人もまた、他者との関係の中で、自分の役目が決まっていくのです。そして、この他者との関係は、さまざまな学校での活動の中にあるということです。

### 「道徳」教科化の背景

いじめ問題や道徳教育における学級間格差への解決を期待して、特別の教科「道徳」が実施されることになりました。今までの「読み物」中心の道徳から、「考え、議論する道徳」への転換が求められ、多面的な見方ができるように、友達の意見を聞き合う「交流活動」を入れるなどの工夫が必要となります。

「交流活動」を活性化するためには、まず、自分の考えをもつ必要があります。そのために、「ひとりになれる。ひとつになれる」というキーワードを示し、どのような意味なのか、子どもに問いかけて考えさせます。

「ひとりになれる」とは、主体的にという意味です。「ひとつになれる」とは、協働的にという意味です。このような、子どもと共有できるキーワードをもつと、よりステキに感じます。

## 今回のキーワード

非認知能力・・・(自制心, 忍耐力, 継続力などの, 数値化できない能力)  
「助けてもらう力」とは, 弱々しいのではなく「人を好きになる秘訣」  
成長物語を共有する  
関係性の中に自分の役割がある  
将来に向けて, 体験を振り返らないともったいない  
ラーニング・コミュニティ  
レバレッジ  
ひとりになれる, ひとつになれる  
モラルジレンマ授業  
ジグソー法

### 学習会に参加された先生方の感想

(参加人数 16名)

- ・自分の勤務校では, 2学期に道德のローテーション授業があり, 道德の教科化に向けて議論もされており, 旬な内容を提供していただきありがとうございます。前回の「アクティブ・ラーニング」についての講座も, 今回の道德についても, すべてが結びついているように感じました。すべての教育活動はつながっていることが, 改めてわかりました。小中連携の話も興味深かったです。
- ・非認知能力と認知能力の話の中の「助けてもらう」という内容は, 授業で話したいと思いました。今まで, 風土会でたくさんのよい話を聞いているはずなのに, いざ, 生徒に話したいという時に, なかなか出てこないのがもどかしく, いつも, 風土会でいただいたプリントや「Teacher's Teacher 1, 2」を何度も読み返ししながら, 生徒に話しています。なかなか, 重枝先生のようにストーンと落ちるような話し方ができずに苦戦していますが, 成功したときは, 生徒の動きがどんどん変化して, 心の中で「ガッツポーズ」できる瞬間が, 時々あります。  
学校をどのように動かしていくかということに, 少し興味がわいています。風土会で学んだことが, 自分にとってかなり大きいです。これからも, 勉強させてもらいます。
- ・「ひとりになれる。ひとつになれる」という言葉が, とても印象に残りました。どちらかにはなれても, どちらにもなれる生徒は, かなり少ないと思うので, このキーワードを使って, 生徒に伝えていきたいと思います。私の学校では, 10月から後期になり, 係活動を交代するので, 細胞の話も生徒に聞かせたいと思いました。
- ・道德教育が教科化になる背景がよくわかりました。保護者や地域の人との関係について迷いがあるなかで「ななめの関係」というキーワードを知り, 大変感銘を受けました。  
また, 「ひとりになれる。ひとつになれる」とてもよい言葉です。主体的で協働的な生徒を育成するために, 学んだことを生かしていきたいです。
- ・「男のひとりぼっち」は同感です。今年度のQ-Uの結果を見て, まわりの友達と関係を築けない男子が不満足群に多くいることに気がつきました。どのようにして, まわりとつないでいくかが, 本校の課題でもあります。今まで, 重枝先生の話から, リーダー体験とメンバー体験の両方が必要だと理解していましたが, 今日のお話ではじめて, 実際に社会で評価されることを知りました。教師が「やればよい」ことではなく, 「やるべきこと」であるとわかったので, 風土会で学んだことを自信をもって, どんどん実践していこうと思いました。
- ・なかなか都合がつかず, 参加の機会は少ないですが, 参加すると毎回, 刺激と元気をもらい, 明日からの教育活動の意欲につながることを感じています。自分自身の研鑽に欠かすことができないものとなっています。もっと多くの教員に広げたいです。

(参加してくださる先生方がいて, 明日からの教育活動への意欲や自信にしていただけるのが, 風土会の存在意義です。第1回目の風土会は, 平成19年11月2日でした。今回が66回目。積み重ねた結果です)